

住宅の初期値

いつからだろう。住宅設計の主題が、「住むこと」の問題から離れていったのは？ 今日的生活は実体が存在せず、捉えどころがなく、またいかなる生活も可能と思えるほど多様化しているといわれる。このような認識においては、建築家が主題としての魅力を感じないのかもしれない。しかし現代人の生活は、社会条件の変化により激しく揺さぶられており、多くの問題が生じている。新たな住宅像を必要としている人びとの眼前にあるものは、小異による多種多様な商品となった住宅である。彼らは生活を真撃に見つめれば見つめるほど、本当に必要とする確固たる住宅像に焦点を絞ることができなくなるのである。

建築がその時代を反映するという性質をもつとしても、この不安定な住宅像の状態それ自体を住宅に表現することに私は関心がない。ましてや「住むこと」に関わりのない表層の表現や建築の独白の問題だけに関わる形態の操作にはなおさらである。家庭の崩壊や家の内実の喪失が叫ばれている現在の危機的状況では、ゼロベースで住宅を考え、ひとりよがりな仮説や時代錯誤の提案であっても、とにかくひとつの明瞭な住宅像を提示すべきだと考えている。コンピュータのリセットボタンを押すように今までの情報を一度捨て去り、現在の情報だけをインプットし、新たなプログラムを始動させたいと常に思う。

□

現在、分離と集積による空間の組替えが都市の中だけでなく、住宅の中においても始まっている。住宅内の空間がバラバラになって都市の中へ拡散しつつある。改めて住宅内の生活と空間の関係を考える時期にきたと思う。重要なことは、空間を効率主義の原則で考えるのではなく、人間が本質的に住宅に何を求めているか、またはどのようにすれば住宅内において自由になれるのかという問いである。この住宅の「1階の間」は平面が5間×5間の広さであり、そしてそれは「2階の間」、「3階の間」とつづきひとつの大きな空間となる。単純でのびやかなこの空間に私は住宅を求め

り、それにより多くの生活を包み込みたい。住宅内に全体を占めるほどの広さの一室が用意されていれば、生活機能を覆えるという仮説を私は信じる。この住宅において機能を捨象することを考えてはいない。ひとつの機能にひとつの空間を対応させる現在の空間構成は、限られた住宅内に新たな機能が生じたとき必然的に空間の不足の問題に直面する。そこでの生活と空間との辻褃合わせには人びとの知恵と強靱な忍耐力と順応性が手助けとなってきたが、そろそろこの解決法には限界がきつつあるのではないか。そのことを狭さと利便性という名のもとに空間を住宅の外に求めざるを得なくなった現在の状況が示している。この大きな一室を提案する私は、自由な精神には一義的に広い空間が必要であるという確信をもつ。

人間はどのような住宅にも一応は住めると私は思う。となれば住宅の本質的価値はどこにあるのだろう。現在の状況を考えて上で、家族が共に住むことにどのような意味があるのだろうか。また、家族が共に住むという実感をどのようにしてもつのだろうか。古代に竪穴住居という庶民の住宅の形式があった。竪穴住居は四本の丸太を土に埋め込み、その上に丸太で井桁を組み、それに垂木をかけた架構を草などで葺いた簡素なものであったという。この稚拙な架構の下で家族がひとつの空間を共有し集うものであったであろう。またその人為的につくったはじめての住居を構成するすべてのものが、即物的な存在であったと想像し得る。このもののあり方に私は大いに興味がある。現在、人びとは空間さえも所有の対象と考えて、空間の経済の世界に浸っている。そのため人びとは空間の不自由さをさらに感じている。竪穴住居での生活に数多くの不便があったことを差し引いても、兎小屋とまでいわれた現在の住宅での生活と比べてどちらが本質的に人間的であろうか。その空間には稚拙な架構が直載的に表れていたために、そこに住む人間と空間との素朴な関係が現在の住宅より明瞭であったであろう。その関係を私たちは忘れかけている。私は竪



穴住居を今日に存在させたい。ここで私のいう竪穴住居は古代のそのままの住居ではない。それは古代の住居がもっていた人間と架構との基本的な関係であり、物質としての住居と人間とのプリミティブな関係である。そこに人間と住宅との初めての回路を私は見る。

□

この住宅の大部分を占める大きな木箱は、平面が5間四方で高さが2間半の柱なしの一層の空間である。屋根構造には正方形平面の特徴から有効に働く斜交格子梁を選んだ。この構造形式は各部材断面を小さくできるだけでなく、その幾何学的規則性が無性格性を示す。壁も斜交格子であり垂直の柱を必要としない。垂直荷重時はもとより風力や地震に対しても同じ斜めの部材に力が働く。線材だけによるこの構造は壁全面の開口も可能である。同じ形状の壁と屋根による構造は籠のような形式となる。外壁は構造から分離され自由になっており、そのことにより構造は可視化され、純粋な形で明示されている。木箱の中には、スロープやブリッジなどの移動装置がボルトにより簡易に取り付けられている。それらは木箱と対照的に鉄細工でつくられた単なるオブジェである。木箱と移動装置のある即物的なこの光景は、私がイメージする住宅の初期値と一致する。

□

私にとって住宅設計は始まったばかりである。いや、私にとってだけでなく住宅設計（建築家が作品としてつくる）の歴史自体も始まったばかりだと考えたい。近代建築は住宅設計とオーバーラップしている。その近代建築が始まってから1世紀であり、建築および人類の歴史と比べて、歴史というにはあまりにも短いのではないか。このような認識をもつ私にとって、この短い歴史を前提とした創作の立場は考えられない。住宅は近代建築の発生時と同様に新しい状況に直面しており、新たな転換を期待されている。近代建築の呪縛から解きほぐされた今、前提を一度ゼロベースに戻し、より自由に住宅を考え提案しようと思えることが、現在の出発点と考える。